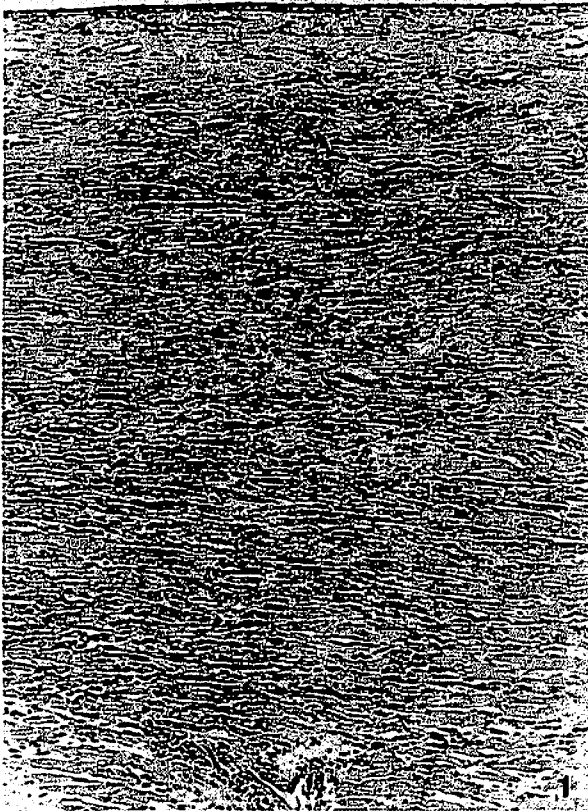


仔犬の心臓

東京農工大学農学部家畜病理学教室 第24回獣医病理学研修会標本No.404



動物：ラブラドルレトリバー種の仔犬，29日齢。飼育地—米国オハイオ州コロバス市。

臨床的事項：1980年3月23日，某犬繁殖場にて6匹の出産があった。母犬は分娩6日後，水様性下痢を示し，食欲不振となったが，2日間で快復した。しかし分娩21日後，同腹の仔犬のうちの1匹が急に可視粘膜蒼白，呼吸困難となって斃死した。その後他の4匹が同様の症状を示しつゝ、斃死した。残す1匹（提出標本例）も生後29日で同様な症状を示したため，オハイオ州立大学獣医学部家畜病院で診察を受けた。本症例は飲水および光に対する反射はあったが，体温39.1℃で予後不良とみなされ，直ちに同学部病理学教室にて剖検された。

肉眼所見：肺水腫以外に意義ある変化は見られなかった（オハイオ州立大学獣医学部病理学教室）。

組織所見：心筋間質には細胞浸潤がみられた。浸潤細胞はリンパ球，形質細胞および組織球から成っていた。細胞浸潤は心内膜側に近い心筋層でより目立っていた（写真1，HE染色，×79）。心内膜下ではプルキンエ（以下「P」）線維を圍繞するような細胞集簇もみられた。しかし，その領域における「P」線維自身には著変なかった。

一方，心筋線維には核内封入体がみられた。封入体は楕円形，長楕円形，長方形など様々であった。封入体周囲には明るい暈があり，核は辺縁部にクロマチンを残し，

線状の輪郭としてみられた（写真2および3，HE染色，×485）。また核内クロマチン網は明らかでなく，核内全域は均質無構造で，封入体で占拠されているような場合もあった。このような封入体では暈が不明瞭であった。封入体は細め（幼若）の心筋線維にみられることが多く，心筋層全領域で観察され，心外膜直下の心筋線維にさえみられた（写真3）。封入体の殆どは塩基好性で，ホイルゲン反応陽性であった。極く稀に両染性と思われる封入体も見出された。更に心筋層には部分的に心筋線維の萎縮および消失がみられた。以上の心筋変化は左心室筋および心室中隔でしばしばみられた。

診断：イヌのバルボウイルス（以下「バ」）性（間質性変化が強い）心筋炎。一般にイヌの「バ」感染の腸炎型にみる核内封入体はエオジン染色あるいは両染性である。しかし心筋炎型である本症例では主として好塩基性核内封入体であった。このことは核自身のDNAとのかかわり合いがあり，「バ」と細胞側（腸管あるいは心臓）の間の host-parasite relationships において，host側の条件の差異により染色態度が異なってくるものと考えられる。また「P」線維周囲性の細胞浸潤は不整脈発生とかかわり合いがあったかもしれない。ちなみに仔犬の「バ」感染症（心筋炎型）の場合，不整脈死が観察されている。